



Child hood

101

一つ大きくなったよ

～早岐幼稚園 平成29年度進級式～

4月6日(木)、早岐幼稚園(早岐2丁目・浦川匠子園長、77人)で、平成29年度の進級式が行われた。

式では一人一人の名前が呼ばれると園児は壇上に上がり、浦川園長から真新しい名札を受け取り、ニコニコ笑顔。名札を付けてもらうと、一つ上のクラスに進級した喜びと期待、不安が入り混じったような神妙な表情に。席に戻って新しい名札を眺めていた。

「友達にやさしく、なんでも頑張るほしぐみになります。おとうさん、おかあさん、応援してください」「友達にやさしく、笑顔いっぱいにつきぐみになります」「元気いっぱいのひかりぐみになります」とあいさつすると、保護者からは大きな拍手が送られた。

浦川園長が「新しい名札、かっこいいですね。自分のことは自分でしっかりとやって、新しいお友達にはいろいろ教えてあげてくださいね」と話すと園児たちは力強く「はい!」と答えていた。

ほしぐみの吉原蒼空(よしはら・そら)くん(5)は「鉄棒で10回ぐるぐる回れるようになりたい」、太田まやちゃん(5)は「鉄棒で逆上がりができるようになりたい」と目標を話してくれた。

認定こども園

早岐幼稚園

佐世保市早岐2丁目12-17 ☎0956-38-2207

子育て支援活動「ひまわりっこ」

園庭開放 毎週火・水曜10:00～11:30

教育・保育相談 毎週木曜14:30～16:30

親子集いの広場 毎週金曜10:00～11:30

※9:40受付開始。上履き、下着の替え、帽子、水筒を持参。

2017.5

＼長崎短大生／の
よかところ探しの旅

使わなくなったおもちゃありますか?

～世界共通の子ども通貨に交換できますよ～



旧戸尾小学校跡地(佐世保市戸尾町)にあるさせぼエコプラザで、「かえっこパズル」を開いているさせぼ環境フォーラム事務局長の里美博昭(さとみ・ひろあき)さん(62)に始めた動機などを聞いた。

◀おもちゃの査定とポイント交渉

「物を大切に育む気持ちを育てたい」と、エコプラザ開設(2005年)時から始まった。月に1度約30人の子どもが参加。年長児から小学生が多いが、大人も参加できる。子どもは持ってきた「使わなくなったおもちゃ」の状態やお気に入りのところをプラザの職員にアピールし、「かえるポイント＝世界共通の子ども通貨」の値が決まる。おもちゃがない子ども、パズルの手伝いをするなどでポイントもらえる。こうして集めたポイントで別のおもちゃと交換できる仕組み。会場では子どもと大人が一緒になって楽しんでいて。孫と一緒に参加した夫津木健心(ふつき・けんしん)さんは「子どもどうしの触れ合いができると思い、連れてきた。人見知りしないで、物を大切に育む気持ちに気付いてほしい」と話した。

一口メモ

「かえっこ」は鹿児島出身のアーティスト藤浩志(ふじ・ひろし)さんが2000年に考え付き、福岡アジア美術館で初めて開催された。以降、日本だけではなく韓国、タイ、アメリカなどでも開催されるようになった。



◀かえっこしました!

私たちが取材しました!!

「かえっこ」することでおもちゃが再び活躍したり、不用品(ゴミ)が減らせるという、子どもと環境のつながりについて知りました。自分が大切にしていたおもちゃで友達も遊んでほしいと思う。さらに、友達が持ってきたおもちゃに触れてみることで、自分もおもちゃを大切にしようと思うのではないかと感じました。

阿部麻裕子(20)、白丸彩香(20)、早田彩香(20)
長崎短期大学 専攻科(保育専攻)1年

※6月号からは「知っていますか?世界遺産と黒島のつと」と題し、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」と構成資産の「佐世保市の黒島の集落」についてシリーズで紹介いたします。執筆者は佐世保市教育委員会社会教育課教育文化係文化財担当の川内野 篤さんです。お楽しみに。

白十字会理事長
富永 雅也



コラム 病気を進行させない医療⑥

「認知症患者に積極声掛けを」

マスコミ広報に期待

富士宮市にできることは佐世保市にもできるはず。富士宮市の活動の発端になったのは、若年性認知症の患者さんがご自身の思いを市民に語ったことでした。そのころ私は意外にも身近な白十字会佐世保中央病院の認知疾患医療センターで、認知症患者さんを支えるボランティア活動をしていただいていた53歳の若年性認知症の方がいらっしやることを知りました。

白十字会では「社会とつながってほしい」という彼の思いを「茶話会・展示会として実現させる場所」として、白十字ビルの一室を提供してきました。彼はさらにわれわれ医師の研修会でも思いを語ってくれました。そのお返しにと、白十字会が主催する「ノルディック・ウォーキング」体験会に招待し、市内の商店街でウォーキングを一緒に楽しみました。

たとえ認知症になっても、住み慣れた街で、出来ないことのみ手助けをいただきたいながら、社会とつながりを切らずに生活していけることこそ、認知症の増悪を予防できる有力な方法のひとつであると思われま。市民が自発的に「仲間に加わらないか」と認知症の方を誘い、パートナーの関係を構築している富士宮市に負けないよう、佐世保市民から多くの誘いの声掛けをいただければ幸いです。

また、富士宮市の認知症の方の多くが自宅に閉じこもることをやめ、認知症であることをご自身で明かし、その思いを語るきっかけとなったのは、卓球や登山を市民と共に楽しんでいる若年性認知症の方を報道した紙面や映像でした。今後、より多くの市民の皆さまの声掛けが得られ、社会参加を楽しんでいるその様子を多くの報道機関が取り上げていただくことがこの運動を成功させる鍵になると考えられ、マスコミの効果に大いに期待するものです。

社会医療法人財団
白十字会